

上田薫の経験主義教育論の現代的意義～環境教育理論のてがかりとして 野田(松本)恵(東京農工大学・博士課程)

現在の環境教育は体験型の実践も多い。しかし、そのような体験学習に対しては「這い回る経験主義」という批判が常套句のように向けられる。ところが「這い回る経験主義」とは、いつ、どのような立場から、何を批判していたのかが明確にされる事はほとんどない。これではこの批判が正当なものなのか判断がつかない。本報告はこのことに答えるために、上田薫の教育論および戦後初期社会科教育論争に注目する。そして経験主義教育および体験学習の今日的意義や課題の再検討をおこなう。

上田薫は、戦後日本における「新教育」、特に小学校社会科において経験主義の「問題解決学習」を提唱した。しかし、彼の提起した「問題解決学習」は、やがて系統を持たない「這い回り」として強く批判される。「生活の中における系統」(梅根悟)とか系統的知識の重要性を認める論者が多い中で、ひとり上田薫はみずからの立場を「動的相対主義」としながら、当時「這い回り」といわれた経験主義教育の意義を主張し続けた。結局日本の教育はその後、経験主義から系統主義へと転換するが、この失敗を受けて今でも体験学習には「這い回り」という根強い批判が付きまとうのである。

上田の立場、特に「動的相対主義」の主張は、近代教育の議論の中で異質な存在であった。保守的立場からも民主的・革新的立場からも批判され、たいていの場合、「不可知論」「混沌を招く」として切り捨てられる事が多かった。これに対して、汐見稔幸(1997)は、現在の学び論の提起をうけ、上田を肯定的に評価している。従来の「科学の内容を系統的に学習すれば科学的な認識力が育つ」という信念に疑問を提起し、クーンと同じような論理展開で早い段階から「科学の相対性」を主張していた上田が肯定的に評価されている。

本報告では、このような動的相対主義に対する評価からもう一步踏み込んで、なぜ、上田は相対主義しかも「動的相対主義」という独特の立場をとり、「這い回り」におちいることをあえて認めながらも「問題解決学習」という手法をとり続けたのか、を検討してみたい。

上田は、民主主義の実現とそのため批判的精神の確立という民主的教師と「同じ」目標を掲げその立場は一貫していたが、あらゆる「絶対」を否定し、独特の「関係」の中で知識や人間存在を見つめ、人間の「個性的統一」の中に知識や道徳的行為を位置づけようとする。ここには、上田薫の独特の科学および知識観、人間観、教育観が透けて見えてくる。この点を整理しながら、経験主義にこだわった上田の教育論は何を大切にしようとしたのかー逆に言えば、その立場をとらないことで教育は何を失うと上田は考えたのかーを明らかにすることで、「這い回り」という批判を乗り越える経験主義教育・体験学習の方向性を示したいと思う。